

日本と東南アジアの神話の絵本に見る「わにだまし」の物語

Tales of “Tricking on WAN” in Picture Book for Children

パットオン・ピパタナクル*

シーナカリンウィロート大学人文学部日本語学科講師

要旨

日本神話の「因幡の白うさぎ」は有名な児童文学作品の一つであり、現代まで様々な形で再編され、語られている。この物語の「わに」（和邇）はサメかワニかという議論はまだ続いている。ほとんどの日本の絵本ではわにをサメの絵で表現している。うさぎはわにをだまして、並んでもらい、その上を歩いて海を渡ったというこの話は、東南アジアやインドの物語にも似ている。マレーシアとインドネシアの昔話では、子鹿がわにをだまして川を渡った話がある。インドの古典の一つである仏陀の前生について書かれたジャータカ物語では、猿がわにをだました話もある。これらの昔話は子どもの絵本に再話され、ワニのイメージを作り上げ、そして固定されたのであろう。

本研究は「わにだまし」に関する物語が日本、東南アジア、インドの絵本の中でどのように表現されているかを考察したものである。多くの絵本の中に共通しているのは「知恵のある者は生き残る」という教訓がある点である。その道徳的教訓を次の世代に伝えるために、絵本の中で、小さな動物とワニに「善・悪」のイメージが作られたと考えられる。

キーワード：日本神話、絵本、ワニ、ジャータカ物語

* Paton Phipatanakul, Lecturer, Srinakarinwirot University

e-mail: patonphipat@gmail.com

Abstract

The tale of “Inaba no shirousagi”, one of the famous stories in the Japanese Myth (Nihonshinwa), is well-known and has been rewritten in many versions in children’s literature. The meaning of “WANI” is still debated that it is “shark or crocodile”. Most picture books in Japan present WANI as sharks. The story is about a rabbit who tricks WANI to cross the sea. There are very similar stories in South East Asia and India. Crocodiles are tricked by little deer in the old tales for children in Malaysia and Indonesia. In Jataka tales, which refer to a voluminous body of native Indian literature concerning the previous lives of Buddha, there are stories about the monkey who cheated on crocodiles. Myths and folktales are rewritten for children in picture books, then the image of WANI became specified and settled.

This research is to study the tales that refer to WANI (shark and crocodile) that appeared in the picture books for children in Japan, South East Asia and India. Most of picture books has the similar point which is “a person with wisdom can be survive”. The “good and evil” images have been created by using the small animal character and WANI, to convey that morality to the next generations.

Keywords : Japanese Myth, Picture book, Wani, Jataka tales

1. はじめに

本研究は、日本と東南アジアの神話の絵本の中の「わにだまし」物語を用いた絵本を取り上げ、「わに」の描かれ方と教訓について調べたものの一部である。

研究範囲：いなばのしろうさぎの絵本（古事記では「**稲羽之素菟**」表記）

インド昔話であるジャータカ物語、パンチャタントラの「ワニ」

東南アジアの昔話の「ワニ」、タイの民話の「ワニ」

2. いなばのしろうさぎ

日本にワニがないため、サメ（鮫）の類をさすといわれる。しかし、神話・伝説の世界では生息したかどうかは別として、爬虫類のワニということも考えられる。

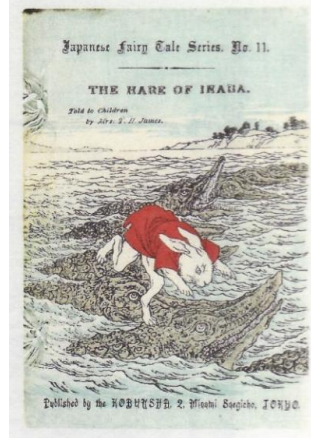
『新編 日本文学全集 1 古事記』（小学館 2004）では「^{さひもちのかみ}佐比持神」という

「一尋和邇魚」がいて、背中に刀剣状のものがあつたと書かれている。『出雲風土記』島根郡では「沙魚（さめ）」と「和邇（わに）」とが区別されている。

江戸時代の版本「^{かみよのまさごときわぐさ}神代正語常盤草」（1848）では^{ほそだとみのぶ}細田富延（1783-1828）が古事記の名場面を、全て絵図でわかりやすく解説した。神野志隆光はそれらの絵を「21世紀によむ日本の古典『古事記』」ポプラ社（2005）において挿絵としてもう一度よみがえらせた。因幡の素兎の場面は、魚の絵に見える。



神野志隆光「21世紀によむ日本の古典『古事記』」ポプラ社(2005) 挿絵、江戸時代の版本「神代正語常盤草」細田富延(1848)



ちりめん本 *The Hare of Inaba* (因幡の白兎)(1885) 奈良国立博物館『古事記の歩んできた道』2012

ちりめん本 *The Hare of Inaba* (因幡の白兎) (1885) (奈良国立博物館『古事記の歩んできた道』2012) には英訳 crocodile 「ワニ」と明確に表現している。

歴史学者の喜田貞吉(1871-1939)は、国定教科書で初めて「因幡の白兎」のワニを「ワニザメ」と表記し、それ以来、だまされるのはサメだということが一般化になった。現在に至って、小学国語の教科書にはサメの絵になって、本文も「さめ」と「白うさぎ」と書いてある。また、戦後の児童文学作品として数多く出版されている「いなばのしろうさぎ」のなかでも、必ずサメの挿絵がある。教科書の挿絵や子どもの絵本の影響もあって、この話のわには「さめ」であるイメージで定着したと見られる。

松谷みよ子『心をそだてる松谷みよ子の日本の神話』講談社(2010)ではこのように説明されている

「このわには「サメ」という考え方が一般的になっている。出雲の方言ではさめのことをわにと呼ぶからだ。しかしわにはやはり川にすむわにだと言う考えがある。東南アジアではかしこい動物がわにをだまして、その背中をふんで歩くといった話が伝わっている。南の国から海を渡って伝わったとも考えられる。」



『いなばのしろうさぎ』(部分)
赤羽末吉 絵/舟崎克彦 文
あかね書房 1995



『こくご 二上 たんぽぽ』(光村図書)2011

絵本作家により、サメの性格がよい時もあり、恐ろしいサメもいる。伝えられるメッセージにも多様性がある。しかし、国定教科書の時代以降には爬虫類の「ワニ」の絵が見られなくなった。研究者の間にはまだ議論が続いている。

三浦佑之は『古事記』に関する多くの研究で「古事記は一つではない」¹と述べている。日本人は南方系アジア人と北方系アジア人の混合である「日本人二重構造モデル」の考え方が有力だという。流入してきた観念や思想と、海や川を通じた人と物の移動や交流がある「日本海文化圏」という古くから独自の文化が存在したと述べている。「稲羽之素菟」神話は「小鹿とワニの物語」という南方系神話の影響があるというのは主流になっている。東南アジア特にインドネシア、マレーシアの昔話には類似の話があり、日本に海を渡って伝わったが、以降少しずつ変化しながらいくつも織り込まれているようだ。しかしお話の教訓である「陸の動物と海の動物の知恵比べ」という点は変わっていないと言えよう。

3. ジャータカ物語、パンチャタントラの「ワニ」

インドの仏教史を見ると、釈迦を出発点とする原始仏教時代・部派仏教時代・大乘仏教時代の三つの時代を通して、経典は作成され続けており、さらにインドから仏教が伝播していく過程で、その渡来地の中国などで作られた経典（偽経）もある。インドはさまざまな宗教・信仰が混ざり、国民の生活にも根強く反映され、アジア各地の説話の源であると考えられる。古代説話は国内だけでなく海外にも伝えられ、それぞれの地域で物語として再話されてきた。タイを始め、アジア各地の絵本にもよく紹介されている。

古代インド説話と言えれば「ジャータカ物語」と「パンチャタントラ」のふたつがあげられる。「ジャータカ」のほうが古く、仏教のお話しを説くために使われた民話や説話を集めた物である。

¹ 平成25年度 立正大学文学部公開講座（品川区共催）『響き合う神話世界—古事記、そして列島とアジア』2013年10月2日～30日

ジャータカ物語 (Jātaka) は古代インドの仏教説話集²のこと。ブッダの生き方を理想のモデルとするブッダ崇拝の一部であり、ブッダになるまで、菩薩として無数の生をくりかえした話である。大乘仏教にも伝承されてはいるが、上座部仏教において重要な位置を占めている。

『三蔵』タイ語訳は 100 冊あり、第 27 巻、第 7 話には「危険から逃れるサル」(タイ語: Wannarintachadok) の話がある。絵本版も現在に至り、なおたびたび出版され、タイ全国に広められた。

「ブッダは弟子に次のように語った。

皆さんは自分のことを何度も殺そうとしているテーワタットを憎むが、昔もそういうことがあったにもかかわらず、自分は危険から逃れることができた。

昔、子馬くらい体の大きいサルが森にすんでいた。川の真ん中に果物などが多く、豊かな島があり、サルはいつも朝は川辺と島のあいだにある石をジャンプして島に渡っていた。夜はその石をジャンプして島から戻っていた。その川にすんでいたワニ夫婦がいた。ある日メスのワニは夫に「妊娠中で、サルの心臓が食べたい」と言った。オスのワニはその石の上に伏せて待っていた。サルがその石をふだんより浮いて見えるので、危険があるのだらうと感じた。「石、石、石」と三回呼んで、「いつも返事したお前はなぜ今日は何も言わないのか」と言った。ワニはそれを聞くと「サル、何がほしいか」と言った。「お前は誰だ」「私はワニだ」「なぜここにいるのか」「お前の心臓がほしいからだ」「では、口を大きく開けていてね。私はお前のところに飛び降りてやるから」サルはワニは口を開けると目が自然につぶるとわかったのだ。ワニは言うとおりに口を開けて、サルはワニの頭にジャンプして川岸にたどり着いた。ワニは不思議に思い、「サル、お前は正直で、ちゃんと考えて行動する、そして正しい道を歩んで自分を

² 仏典「三蔵」とも呼ばれる Tripitaka (トリピタカ) の中に収められている。

犠牲しても良いことをするという4つの道徳をもったため、危険を逃れることができたのだ。リスクがあることを知りながら運命にかけた。」とほめた。

ブッダの話聞いて、弟子たちは、ブッダの前世はそのサルで、テ
ーワタットはワニだったということがわかった。」

矢崎源九郎（やざきげんくろう）『子どもに聞かせる世界の民話』（実業之
日本社、1964）でこの話を「タイの民話」として「サルのきも」という題で
紹介された。上記の話の追加分は次のとおりである。

サルは山にかけのぼると、やがて、イチジクの実を二つとってきま
した。

「ワニさん。これがサルのいきぎもだよ。おくさんにたべさせてや
りなさいよ。」と言ってワニにわたしました。

ワニのだんなさんは喜んでそのイチジクをうちへもって帰しまし
た。

「おまえ、サルのいきぎもだよ。ほら。」とワニのだんなさんはお
くさんに見せました。

「まあ、ほんとうに。とってもおいしそうだわ。」おくさんは、さ
っそく、それを、たべました。すると、病気が、けろりと、なおって
しまった、ということです。

この話はインド起源と見られますが、イチジクを食べて病気が治っ
たところはユーモラスでいかにもタイ人の明るい性格があらわれてい
ます。（pp.13-15 矢崎源九郎）

パンチャタントラ(*The Panchatantra*)は、西暦200年ごろにヴィシュヌ・シ
ヤルマーによって作られた。動物などの物語を使って王族の子に政治、処世、

倫理を教示する目的で書かれた児童向け書籍として世界最古だと言われている。タイではインドの昔話として「世界民話」の絵本の中で見られる。

パンチャタントラは、生き抜くための知恵を使った動物たちの物語で、本来なら当然やられてしまう小さな動物達が、生き残るために大きな動物に立ち向かう、その闘いと復讐のお話が多くある。第5巻の第84話が次のような話がある。

パンチャタントラの『サルとワニ』

川岸にあるふともも (*rose apple*) の木に、一匹の猿が住んでいた。

ある日一匹のワニが川から出てきて近づいてきた。「僕は遠いところから来たワニだよ。食べ物を探しているところなんだ。」「食べ物ならふとももの実がたくさんあるよ」猿は実をいくつかもいで、下に向かって投げ、ワニはそれらを食べてた。それから二人は友達になった。ワニは妻に実を食べさせてみたら（もしサルがこんな甘い実ばかりいつも食べているなら…彼の肉もさぞや甘いに違いないわ）ワニの妻は思った。ある日、彼女は仮病をつかって涙を流しながら「医者に診てもらったら、猿の心臓を食べさえすれば元気になるだろう、と言われました」と言った。友だちに危害を加えるなんてできないと思ったが、やはり妻を見捨てられなかった。ワニは家に招待すると言って、背中にサルを乗せて、川を泳いで渡りはじめた。ところが、川の中ほどまで来たとき、ワニは沈み始めた。ワニはサルに「君を殺して心臓を彼女に食べさせるんだよ」と告白した。サルは「親友よ。なぜそれを早く言ってくれなかったんだ。君の奥さんを救うためなら、喜んで僕の心臓を差し上げるよ。僕の心臓はふとももの木の穴の中に大事にしまってきたんだ」と言った。ワニは向きを変えるとふとももの木に向かって泳いだ。川岸に着くやいなや、猿は飛び降りて急いで木

に登った。高い枝に腰をかけて下を見下ろしてワニに言いました。

「奥さんに言えよ。おまえの夫は世界で一番のバカだってな！」

結局ワニは友だちをだまそうとしたが、逆にだまされてしまった。

日本の世界的に有名な童話の一つである「くらげ骨なし」ともいう「猿の生肝」も似たような内容である。日本の説話集の注好選、今着物語（巻第五・天竺部）などにも類話がある。

治病の妙薬として、サルみょうやくの生肝を取りに竜王から遣わされたくらげが、サルをだまして帰る途中、その目的を洩らしたため、サルに生肝を樹上に置き忘れたとだまされて逃げられた。その罪を竜王に責められ、打たれて骨なしになった。

くらげが亀となっている話もある。この場合は打たれて骨なしになる代わりに、サルに石を投げつけられて甲羅にひび割れができる。

少年少女世界名作全集『今昔物語』（ぎょうせい、昭和57年初版）ではインドから伝わっただまされたかめの話がある。

メスのかめはサルオスのきもの葉がほしかったので、オスのかめがサルに「私の住んでいるところはおいしい木の実が一年中食べられるので連れて行ってあげよう」と言った。サルはかめの背中に乗って行くと、殺されるとわかったので、自分の肝は木にかけておいたのだと言った。カメがそれを信じて木のところへ連れて帰ったら、サルが木の上上に逃げてしまった。

タイで出版された世界の昔話の絵本にもこの話を日本のお話として紹介している。

ヒンドゥー教の聖典の1つである叙事詩『マーハーバーラタ』に登場する英雄であるアルジュナ (*Arjuna*) は、呪いによってワニの姿に変えられていたアプサラ（天女）たちを助けた。

インドではワニが神聖な生き物として扱われ、ワニは水辺にいることから、竜神、海神という水に縁のある神となり、航海の神となった。ヒンドゥーの女神ガンガーの乗り物にもなった。

ワニが出てくる昔話は仏教説話集だけでなくインドの人々の信仰が現れるヒンドゥー神話にもある。しかしワニの良悪のイメージが違っているようである。ジャータカ物語やパンチャタトラの仏教説話ではワニがだまされて、利用されたという、恐ろしい動物は最後は仏に従うものだと語られた。世の中の悪者どもでも仏法に共感を持ち、仏の教えに従えば良い者になれる。その思想は昔話と絵本の素材になって、後世に伝わってきたのである。

4. 東南アジアの昔話の「ワニ」

マレーシア・インドネシアの昔話では「カンチル」 (*Kancil*)³ は頭がよくて、ワニや大きな恐ろしい動物に勝つとよく描かれている。小さいものが鋭い知恵で大きいものに勝つと語られ、カンチルは主人公であることが多い。ここで絵本の中のカンチルとワニの話为例としてあげる。

サン・カンチルとワニたち

サン・カンチル (*Sang Kancil*) はジャングルに住む動物の中でもいちばん小さな動物として知られている。この昔話は小さなサン・カンチルが強いワニをだましたというお話である。サン・カンチルは川を渡り切ることができるように、ワニたちに繋がって並ぶように命令した。じょうずに、川を渡り終わるまで、ワニたちの背をピョンピョン

³ マレー語で「豆鹿」の意味で、小さい鹿のこと

と跳んだ。川の反対側に着くと、自分がワニをだましたことをからかった。ワニたちは腹を立て、今でも悔しがっている。

サン・カンチル、ケルバウを救う

この昔話はサン・ベダル (*Sang Bedal*) という恩知らずのワニのお話である。倒れた木の下敷きになって身動きができなくなったサン・ベダルは助けを求めている。水牛のサン・ケルバウ (*Sang Kerbau*) は角を使って木を動かし、ワニが動けるようにしてあげた。しかし、ワニはケルバウを食べようとして、足に噛み付いた。サン・カンチルが通りかかって、考えて言った。「どうやってベダルが倒れた木から逃れ出すことができたのか、もう一度やってみてくれないか。」すると、ケルバウはワニに捕まっていた足が自由になり、ワニの背中に木を落としました。ワニはまたまた木の下に捕われてしまったのだった。

Bayu Aditya "Koleksi Lengkap Petualangan si Kancil"

Penerbit Setia Pustaka, Indonesia.

これらの物語の中ではワニが悪者で、小さい動物をいじめたりしたが、最後はだまされてしまい、負ける側になる。

タイ語版の絵本にはだまされた後のワニはほかのワニたちに怒られて、仲間はずれされてしまったと追加された。

アジア心の民話シリーズ (総監修: 松谷みよ子) 『語りおばさんのインドネシア民話』(星の環会、2001)では「いたずらカンチル」の題で紹介された。カンチルはワニにいたずらをする話である。

「いたずらカンチル」

「ワニさんは大きいね。でも、仲間がいないの。カンチルほどはいないだろうねえ。」 「そんなことないよ」と答えて仲間をよびあつめ

た。カンチルは並んだワニの背中に飛びのって川をわたった。ワニはしかえをしてやろうと思ってカンチルの足に噛付いたが、カンチルは木の枝を出して、「ぼくの足はこっちさ」と言った。ワニは信じて口を開けたのでカンチルは逃げられた。今度はワニは幹の折れた木のふりをして、カンチルは「ワニさんなら、いつまでも立ってられるけど、木ならすぐにたおれて、でんぐりかえるな」と言って、ワニはまただまされた。カンチルは何度もワニをだましてやったので、ゆかいでたまりません。

ベトナム民話「うさぎの計略」^{けいりやく}

うさぎはお百姓さんにつかまえられて、逃げようとした話である。逃げて走っているうちに、川のほとりにきました。川は広くてわたれそうもありません。わにが泳いでいました。「わにさん、いつもながら、すばらしい姿ですね。わたしを向こうの岸まで乗せてくれたら、お嫁さんをお世話したいね。」わには喜んでよってきました。そして向こう岸までわたししてくれました。「ばかなわににだよ。だましてやったぞ。へっへっへっ。」これをわにが聞いてしまったのです。

ワニは大きな口でうさぎをつかまえてしまいました。うさぎが「そんなことしたって、こわくないね。ハアハアと、口を開けて息をしたらこわいけど。」といいました。すると、わにはほんとうにハアハアとしました。うさぎは口から無事に逃げだして、ジャングルにもどりました。

アジア心の民話シリーズ（総監修：松谷みよ子）

『語りおじさんのベトナム民話』（星の環会、2006）

ベトナム民話では食べられそうになったうさぎは一生懸命生き延びようとして、ワニをだましたわけである。日本で伝えられるインドネシア民話の「いたずらカンチル」と比べると、ワニをだます趣旨は違っているということであ

る。タイ語版の絵本においても ASEAN 諸国⁴、特にマレーシア、インドネシアの「わにだまし物語」を数多く紹介されている。

5. タイ民話

タイ民話の有名な物語の一つは「クライトーン」という英雄とワニとの戦いの話である。この話はタイ北部地方ピチット県のお話であり、子供向けの絵本版、漫画版の他、映画、演劇などにも使われている。

川の底に、チャラワンというワニが洞窟に住んでいて、人に姿を変えられることができる。ある日、チャラワンがいつものように人狩りにかけると、川でピチット国王の娘、タパオゲーオとタパオトーンの二人が水遊びをしているのを見て、タパオトーンの美しさに一目ぼれ、洞窟にさらってしまった。クライトーンという少年がいて、連れ戻すように王から命じられた。彼が呪文を唱え始めると、チャラワンの体は火で焼かれるように熱くなり、洞窟の外に飛び出した。闘いが始まり、クライトーンの槍がチャラワンの心臓を一突きした。勝利したクライトーンは、タパオトーンを救い出し、川から上がった。ピチット国王はクライトーンに娘のタパオゲーオとタパオトーンを妻として与えて、いつまでも幸せに暮らしたのだった。

この他にも川の物語が描かれているタイの絵本にはよくワニが出てくる。ワニはタイでは水の恐ろしい動物であり、説話・物語などでは怖いものとして扱われるが、なぜか親しみを感じられていたのは、昔からタイ各地にいる動物だからであろう。

⁴ASEAN（東南アジア諸国連合）は、タイ、インドネシア、シンガポール、フィリピン、マレーシア、ブルネイなど 10 か国が加盟し、地域協力として 1967 年の「バンコク宣言」によって設立された。



6. まとめ： 絵本の「わに」のイメージの変遷

日本、東南アジア、タイのこどものための絵本や児童文学作品を題材として調べたところ、「わにだまし」の物語は類似しているものが多いことがわかった。いつの時代からか明確ではないが、アジア各地でワニはだまされて、小さい動物に利用されると語られている。絵本の中ではワニのイメージはさまざまであるが、争う相手と比べて、強くて大きいものに描かれることが多い。相手の動物は国によって、うさぎ、小鹿、サルではあるが、いずれも小柄の動物で弱いものと扱われ、頭のよい動物のイメージがある。絵になるとそのイメージが一層わかりやすく、代々伝わったのだと考えられる。児童文学作品では、だますほうも、だまされるほうも理由があるとはっきり書いている。「わにだまし」物語は、アジアの子どもたちに教訓を覚えてもらう物語として、地域の伝統文化の一つとして大切にされている。

表：日本と東南アジアの絵本の中に語られている「わにだまし」物語の比較

お話	姿	性格	住まい	争う相手	結果	教訓
1.因幡のしろ兔(ちりめん)	ワニ	恐ろしい	海	うさぎ	ワニはうさぎにだまされて怒ったのでうさぎの皮をむいた。	陸の動物と海の動物の知恵比べ 「人を騙すと報いを受ける」
2.いなばのしろうさぎ(戦後)	さめ	絵本作家によって色々	海	うさぎ	さめはうさぎにだまされて怒ったのでうさぎの皮をむいた。	陸の動物と海の動物の知恵比べ 「人を騙すと報いを受ける」
3.ジャータカ物語	ワニ夫婦	悪くはない。欲がある。	川	さる	ワニはサルをだまそうしたが、逆にだまされた。	善は悪に勝つ。 弱い者は知恵で難を逃れる
4.パンチャタトラ	ワニ夫婦	悪くはない。欲がある。	川	さる	ワニはサルをだまそうとしたが、逆にだまされた。	善は悪に勝つ。 弱い者は知恵で難を逃れる
5.カンチルとワニたち	ワニ	絵本作家によって色々	川	小鹿	ワニはカンチルに並ぶようにだまされた。	弱い者は知恵で難を逃れる
6.ケルバウを救う	ワニ	恩知らず	?	水牛、小鹿	ワニは水牛に助けられたが裏切ろうとしたが、小鹿にだまされて木にはさまれた。	弱い者は知恵で難を逃れる
7.うさぎの計略	ワニ	悪くはない	川	うさぎ	ワニはうさぎにだまされた。	弱い者は知恵で難を逃れる
8.クライトーン	ワニ人間	恐ろしい	川の底にある洞窟	強い男	ワニは魔術、呪いにやられて、戦いに負けた。	人間は川の恐ろしい者に勝つ。川には未知の世界がある。

※ 1-2. 日本、3-4. インド、5-6. マレーシア、インドネシア、7. ベトナム、8. タイ

日本における絵本と言えば、平安時代の絵巻物を起源とし、江戸時代の赤本、明治時代の欧米の印刷技術や翻訳絵本の歴史があって、現在のような絵本の形態になってきた。戦前・戦時下には児童雑誌や国定教科書で戦争を美化するようになったが、戦後に古事記の「因幡のしろ兔」はすみを塗られず⁵、絵本や紙芝居が発行され続けることができた。多くの絵本の中にはワニの姿がサメで表現されている。うさぎが主人公であるため、だまされた後のサメはどうなったかについて、あまりかかれていない。仲間と列になって、うさぎや小鹿に背中を踏まれて海や川を渡るところはマレーシアとインドネシアの物語に類似している。体が小さいが知恵のある者は、どんな障害や困難があっても逃れることができると教えている。インドから伝承されてきた仏教の古典のジャータカ物語とパンチャタントラでは、ワニはサルと仲がよかったが、妻を思ってサルをだましてしまったので、逆にだまされた。サルはブッダの前世であり、ブッダの悟りに邪魔する者がいたが、善は必ず悪に勝つという教訓が絵本で伝えられてきたと言えよう。これらの話はタイでは2000年代になってから絵本としてかなり出ている。そのほかにもワニがいる物語で、絵本になったのも少なくない。現在は絵本によってワニは、日本では海にいるサメ、タイでは川にいるワニ、というイメージが定着している。

インドと東南アジアの絵本の「わにだまし」物語で共通しているのは、次の点である。

- ・だまされる者は「海や川に住んでいる硬い背中を持ちゆっくりと動く動物」であるのに対し、だますほうは「山や陸に住んでいる小さいが素早く動く動物」である点。

- ・力のある側と弱い側との戦いが「恐ろしい、外から来る動物」と「小さいがかしい動物」との戦いに表現されている。知恵を使って難を逃れることを

⁵ 日本の戦前の国民学校で使われていた教科書は軍事物や戦争教材が多かった。戦後まもなく、学生は自分の手で、教科書の国家主義の意味合いが強い部分を墨で塗ることになった。「墨塗り教科書」と呼ばれる。

絵本で次の世代に伝えている点の2点である。これらは強い動物、つまり権力があって支配する側に勝とうとする支配される側の話と考えられるのではないだろうか。弱い者でも知恵を使えば勝つことができるという教訓を子ども達に伝えているとも言えよう。

昔話や神話は世界各地に、いつから、どのように語られて、代々受けつがれてきたか明確にされてはいないが、物語の世界では仏教伝承の影響以外にも、古代の人と学問の交流があったため、各地域に伝えられてきた話は遠くから響いてきたと考えられる。絵本は、昔からの教訓を伝達していくための重要な教材・道具でもある。今後の課題として、『古事記』とジャータカなどと比較し、関連性、相違点などに注目しながら、ジャータカが釈迦の「前世譚」であるのに対し、「因幡の白兔譚」が大国主命の国譲りの一部として語られていることをさらに考察したいと思う。

<参考文献>

Bayu Aditya “Koleksi Lengkap Petualangan si Kancil” Penerbit Setia Pustaka, Indonesia.

Chot Srisuwan “Nithan Chadok Song Phasa” Satapornbooks.

Jantane Pongprayoon “Nithan Chadok 1” Se-education.

Jamrat Duangtisarn “Tripitaka, Nithan Chadok” Ministry of Education, Thailand.

赤羽末吉 絵／舟崎克彦 文（1995）『いなばのしろうさぎ』あかね書房

あらし よしんど／國學院大學神道文化学部教授、古事記学会理事（2012）

特別陣列『古事記の歩んできた道—古事記撰録一三〇〇年—』、奈良国立博物館、古事記学会

今岡 深雪 文、掛川 晶子 絵、『ジャータカ物語』浄土宗

神野志隆光（2005）『21世紀によむ日本の古典『古事記』』ポプラ社

松谷みよ子（2010）『心をそだてる松谷みよ子の日本の神話』講談社

松谷みよ子 総監修(2001)アジア心の民話シリーズ『語りおばさんのインド
ネシア民話』星の環会

松谷みよ子 総監修(2006)アジア心の民話シリーズ『語りおじさんのベトナム
民話』星の環会

源隆国 編、西沢正太郎 文、新装 少年少女世界名作全集 44(1982)『今昔
物語』ぎょうせい (昭和 57 年初版)

日本テーラワーダ協会『ジャータカ』

(<http://www.j-theravada.net/jataka/index.html>)

矢崎源九郎 (1964) 『子どもに聞かせる世界の民話』実業之日本社

山口佳紀、神野志隆光 校注・訳者(2004)『新編 日本文学全集 1 古事記』
小学館